

地方自治通信

自治体革新の創造と交流のための月刊誌

特集／飛鳥田一雄インタビュー

人生 所詮 ひとりぼっち

●補論

社会党の政策立案能力と書記局 ●上総三郎
「政治契約」・未整理ノート ●須田春海
市長・飛鳥田さんとわたし ●田村 明
飛鳥田革新市政の総括のために ●鳴海正泰
飛鳥田一雄去る ●後藤喜八郎

<資料>

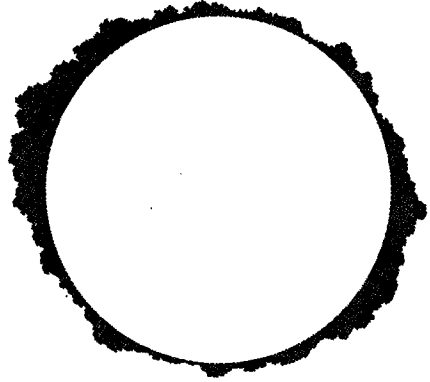
飛鳥田一雄と横浜市政・年譜
飛鳥田一雄委員長と社会党・年譜

1984・No.170

1

地方自治センター

1-1984 JANUARY NO. 170



風紋 年頭あいさつ…伊藤三郎／歴史は過去の重い足をひきずりながらそれでも動く

西尾孝明… 2

特集●飛鳥田一雄インタビュー

人生 所詮 ひとりぼっち

市長と委員長の権限のちがい／あえて丸腰で三宅坂へ行く／書記局と党の政策形成能力／「百万党」構想の真意／規格化された生活と管理ファシズム論／「政治契約」の発想・党と市民の関係を問う／共同戦線党と新しい社会主義の発見／社公連合政権構想をめぐって／都知事選問題と馬場書記長問題／大都市問題・ハードとソフトの連結を／都市政策に対する社会党の弱さ／横浜のまちづくり・プロセスの重視／第二期革新自治体の展望／人生所詮ひとりぼっち ……ききて・本誌編集部… 6

<補論>

| | |
|--------------------|-------------|
| 社会党の政策立案能力と書記局 …… | 上総 三郎…13 |
| 「政治契約」・未整理ノート …… | 須田 春海…21 |
| 市長・飛鳥田さんとわたし …… | 田村 明…39 |
| 飛鳥田革新市政の総括のために …… | 鳴海 正泰…46 |
| 飛鳥田一雄去る …… | 後藤喜八郎…71 |
| 飛鳥田一雄と横浜市政・年譜 …… | 作成・鳴海 正泰…52 |
| 委員長飛鳥田一雄と社会党・年譜 …… | 作成・長谷川崇之…54 |



今月の雑誌から…73

折々の記…75

事務局だより・編集メモ…76

昭和三十七年の暮もおしつまって、私はそれまでの仕事を捨てて大阪から東京へ帰ってきた。まだ新幹線もない時代、夜汽車であった。前途は不安が多かったが、都市づくりや地域づくりをするプランナーを一生の仕事にしようと思ったからである。

私のいなかった十年ほどの間に、東京の町は大膨張して、もはや住めるところがない。やむなく住んだのが横浜であったが、その時は、横浜市とは何のかかわりもないし、飛鳥田さんも知らなかった。たまたま私の住んだアパートは山下公園の前の高層ビルで、港へ入ってくる外国船がよく見えた。町は寂れてはいたがこの近代文明の窓口であった横浜は、いつの間にか私の心をとらえていた。私はまさに東京の大変貌、大変動の中で、東京から押し込まれて横浜に住んだのである。すんなり東京に住んでいれば横浜とはそう深いかかわりを持たなかったろう。都市の変動による横浜住い



市長・飛鳥田さんとわたし

が進路に大きな影響を与えることになった。そのころ、横浜市長に飛鳥田さんが当選した。大阪の時代、飛鳥田に近く住んでいた私には親しみのある名前だった。黒いジェット機や、全国最高の少壮代議士という新聞記事も記憶にあった。市長になった飛鳥田さんは、直接民主主義、市民参加、一万人市民集会を提唱した。それは、カビのはえたような感じのあった市役所イメージを吹き払うものであった。私も地方自治や市民に民

田村 明
(法政大学教授)

だから私は初対面なのに、当時山下公園に高架の鉄道貨物線が建設され景観が台なしになることに文句をつけた。飛鳥田さんは以前から決っていたこと。費用などの点でやむをえなかったことを、まだ若僧だった私に熱心に説明してくれた。納得できない点もあったが、とにかくエライ近寄りやすい市長ではなく、話のできる親しみある人という印象であった。まさに市民参加を推進するのびつたりの市長だったのである。

主義の原点があるのを新鮮な気持ちで感ずるところがあった。

はじめて飛鳥田さんに会ったのは、たしか二十人ほどの学者と一緒に港灣局のランチに乗って海から横浜の視察をしたときであった。颯爽たる少壮政治家というイメージよりは、どっしりとした、それでいて漫画になりそうな親しみもてる風貌だった。足の悪いこともその時はじめて知った。

その後、私のいた地域計画の事務所が横浜の町づくり計画をたてることになった。都心部は戦災が引きつづく敗戦後の米軍の接収によって荒廃していた。郊外部は東京から押し出されてきた人口による無秩序な開発を防止できないで、横浜は人口が多すぎて自立性を失った都市になっていた。これを横浜らしい個性をそなえた自立性ある都市にしなければならぬ。ただし市の財政は窮乏している。何とか新しい方法を考えて整備してゆかなくてはならない。私にとっては市民でもあり他の都市や地域の計画より身の入る仕事であった。

しかし、当時はまさか市役所に入るとは思ってもみなかった。昔、役人を何度かやって、もう役人はやめだと思っていたからである。それが、たまたま市に新しく設けられた企画調整局で「まちづくり」の仕事をするようになった。入ったその日からの初仕事は、すでに都市計画決定した高速道路を地下化して大通公園を造ろうという仕事で

あった。「今までの事情も知らずに新しく市に入
った田村が市長をたきつけて出来ないことをやら
せている」という評判が中央官庁の方からきた。
しかし実際は飛鳥田さんの強いリーダーシップで
スタートしたものである。ただ、私もあの四、五
年前に話した山下公園の高架鉄道のことを考え
て、これは何とかやらなくてはならないと思っ
た。飛鳥田さんにも、山下公園の鉄道のことには心
に残っていたのだろう。高速道路に対し「これは
眉間の傷だ」と言った。むずかしい交渉で何度か
暗礁にのりあげそうになったし、苦しい山をいく
つものりこえて今日の大通公園が生れ、それが、
くすのき広場、馬車道、伊勢佐木町プロムナード
など一連の町づくりをするきっかけになったので
ある。

飛鳥田さんの市長としての功績は、何といたって
も自治体を市民の側に立つ市民自治の主体として
変えてゆくことを主張し実践したことである。も
ちろんそれは、憲法に記されており、戦後の民主
的改革の中の重要な柱であった。ところが実情
は、まだ戦前の姿からそう大きく変わってはいな
かった。自治体に対する市民の関心や意識もよう
く、中央官庁の下請出先機関のような形で運営さ
れていた。自治体は市民に信頼されていないし、
「お役所」的な仕事や雰囲気を感じてはいないかっ

た。

それが現在では、全国どこの自治体をみても、
市民参加を説かないところはない。自治体の体質
もずいぶん民主化された。自治体や地方の主体性
や自主性を説くところも多くなつたし「地方の時
代」が叫ばれている。もちろん、市民参加や、市
民自治による自治体の変革は永遠の課題であるか
ら、すべてがうまくいったとはいえない。しか
し、二〇年前に市民参加が強い抵抗の下に提唱さ
れ、実行されたことを考えるとまるで違う国へ来
たような気さえする。飛鳥田さんが、自治体にそ
の本来の姿である市民自治による主体性ある路線
を敷いたことは確かである。これまでの下請的官
僚自治体を、主体的市民自治体へと転換させるこ
とにより、中央では十分扱えなかった公害防止、
福祉、まちづくりなどの新しい課題の提起や、新
しい手法が開発されていった。自治体は実質的に
甦ってきた。新しい人材を自治体に引きつけるこ
とにもなった。

そうした中から生れたさまざまな横浜方式は、
国に取り入れられ、全国自治体の範になったもの
も多い。現に、町づくりの手法について、いまで
も横浜を学ぶため全国から訪れてくる。それは政
治的な保守・革新ではなく、自治体が市民の側に
立つて前例や形式主義にとらわれず主体的に考え
ることによって実現されたのである。たんに政党
の利害得失だけに立っていたのでは、長い目にた
った良い町づくりができるはずはない。

飛鳥田さんは市長選挙では一貫して社会党公認
を名乗ってきた。しかし市長としては、まず市民
的であって党派的是ではなかった。自治体として横
浜として良かれという問題については、政治的立
場の異なる人をふくめてあらゆる人たちと柔軟に
話をし協力も求めたし、また市民のためには外部
からの強い力もおそれなかった。だからこそ、私
も新しい自治体の方策についてさまざまな試みを
立案し、実行できたのである。横浜で生み出した
「都市づくり」の方式は党派に関係なく全国で評
価されているし、大きな都市変動に対して適切な
手法を生み出したのである。飛鳥田さんの好き
だった「地方が中央を包囲する」とはまさにそう
したことをいうのではないだろうか。各自治体が
国ではできない問題を体を張って解決に当り、市
民の信頼に具体的に応え自治体の総合的な自主能
力を発揮し、遂には国をもそのような路線に乗ら
せ自治体を認めさせてきたのだから。

ところがそれにしては、あれだけ立派に全国の
モデルになる都市問題に対応した横浜市の市長で
あった飛鳥田さんが、その後大都市への展望や具
体的対応策を見失ってしまったのは不思議であ
る。狭いイデオロギーや観念論では、現代のよう
な複雑な都市、とくに大都市に対応できないこと
は、横浜時代はあまりにも自明のことだったはず

である。じっくりと地域に根をはり、地域の実践によって成果をおさめてきた人が、地域を離れてから、市民も都市も見えなくなったとしか言いようがない。

それにしても横浜を離れて選挙区まで東京へ移してしまっただけは解せなかった。横浜こそ飛鳥田さんの生まれ、働いた地方なのに、それを捨てて中央へゆくのは良いところを失うのも当然である。これでは「地方が中央を包囲する」どころか「中央による地方の解体」ではないのか。それに忘れてならないのは、東京だって地方のひとつであることである。東京一区はまさに私の生まれ育った所だが、そこに代議士、市長として三十年近くやってきた横浜の飛鳥田さんがなぜくるか。これでは東京一区という地方の住民は殴り込みをかけたようなもので、飛鳥田さんの言っていたことの正反対である。残念なことであった。

飛鳥田さんの仕事のやり方の特徴は、何といっても具体的に考え、具体的に表現してゆくことであった。抽象的概念や観念ではなく、すべての施策はいかに市民に分かる形で、分かりやすく見せるかであった。むずかしい理くつや、役所的論理に自己満足せず、常に具体的に表すことで、市民と自治体のつながりをもととしたのである。私も教えられた面が多いが、市長を去って委員長

になってからは、逆に抽象的、観念的表現が目立っていたのは、私にとっては全く意外であった。正反対なのである。私の知っている飛鳥田さんはいったいどこへ行ってしまったのだろう。

横浜では、いつも自由に愉しい雰囲気をつくりだしていた。民主的なリーダーシップとは、周りの人を愉しくさせること、そしてお追従、おべんちゃらでない自由で率直な意見を言わせることであらう。毎週月曜日の早朝に、市長を囲んで数人の首脳部会議を開いた。議題に入る前に、いつもさまざまな話題での放談会をもった。笑声が絶えないなかなか愉しいものだった。そうした雰囲気や、重要議題に入ってから敵しい意見対立や、困難な障害に当たるときでも、最終的には首脳部の共通の連帯意識につながったと思う。けわしい意見の交換もあったが、そんな中でもよく冗談をとばした。私もいろいろな職場にいたが、上下に関係なく、こうした自由な発言をしあえる雰囲気は一般の役所や会社にはほとんどない。まるで自由業集団のような活発で愉しい雰囲気をもっていった。それが、どんなむずかしい課題にも、やってやろうという気をおこさせたのである。

若い人や現場の声も尊重した。会議の席で一番隅っこにいるこれらの人々をつかまえて直接発言させることがよくあった。それらの人々にやる気をおこさせるし、会議も実態にそくした実のあるものとなる。

飛鳥田さんは自身アイデアマンであった。よく

両手で水を掬うような手つきをして、「両手いっぱいアイデアがあるんだけど」と言っていた。しかし、市長の出したアイデアにも、皆でその場で、そりゃあ駄目だとか、問題だとか、平気で欠点を指摘し議論をした。市長ともよく討論になる。その中で消えてしまいうものは多い。こんな自由な議論であるから、やるようになったものは皆も責任をもって実行する気になるものである。

反対意見もよく受け入れた。だから議論になるし、議論できるわけである。こんなことがあった。飛鳥田さんは「横浜の子供たちのためにプロ野球場をつくるのだ」といつも強調していた。場所は市役所の前の横浜公園にある古い球場の建て替えである。しかし、いろいろな問題が多くてそう簡単にはゆかない。はっきり反対論者も多かったし、私は慎重論であった。ところが住民やお客さんの前でも、「私はやる気だが、ここにいる田村くんは反対しているんだけど」とニコニコしながら言っていた。ふつうなら内部不統一ということだが、あけすけに他人にも言ってしまうことが、かえって雰囲気やなごやかにさせた。人徳であらう。だからこそ数年後に情勢が熟してきたとき、私はこの問題を全力でやった。市民の力による株式会社方式という結果的にみると最高の方法ですばらしいスタジアムが生れたのである。もし時期でもない時に強圧的に市長が命令を下してもロクな仕事にはならなかったらう。反対意見も受け入れることによって、けっきょく人をうまく使

長期に入りましたが、それとほとんど同時期に政治の反動化・保守回帰が始まり、それと期を一にして、革新首長の後退が始まりましたね。やはり「地方の時代」と言いながら、日本では地方は中央に従属しているということなんでしょいか。

飛鳥田 うん、それが一つ。それと、世界的な傾向ですよ。ミッテランが大統領になる少し前に僕に言ったんですが、「革新は好況の中でしか存在しないよ」と。不況になると保守が伸びて来る、ということもミッテランはさかんに僕に言ったですよ。僕も全く同感だと言ったんです。

結局、不況になるとね、人のことをかまってる暇がなくなっちゃるんですよ。あなたならあなたが、ご自分の家庭を守る。不満は不満だけど「これ以上、下に転落するよりもここに止まっている方がいい」。それで保守になるんですよ。「ルンペンになるよりは」と下を見るんですよ。「俺は月五十万の収入があるけど彼は三十万。それなら俺の地位を守ってしよう」という保守傾向。これが不況第一期の特徴ですよ。その不況が二期になり、もっと深まってどうしようもない大変な状況の第三期になって来ると、自分自身の地位さえ怪しくなってくる。すると「これじゃあいけない」と、そこで初めて革命的な情熱に変わるわけよ。そのときに本当の革新ができる

っていることになる。

ただ、人を使うという言葉は嫌いだ。『ぼくは他人を使つたなんて思ったことは一度もないよ。皆ぼくの仲間として一緒にやってくれたんだよ』といつもいっていた。それは口先ではなく、飛鳥田さんの人間味からでいた。

飛鳥田さんはよく人々に仕事を委せ、やる気をひきだした。「失敗をおそれずやれ」とよく言った。口ではそういうが、実際はそうでない人もいる。それでは役所の人々は動かない。飛鳥田さんは一所けんめい、やっている人々は文字どおりバックアップした。自治体では新しい仕事をやる以上、反対者や反撥者がいるのは普通である。それを事なかれという消極的姿勢では市民のための施策ができるわけがない。細いことをいうのではなく、窮地に立った意欲ある職員の間場を守ってやるのが本当のリーダーシップではないだろうか。私も市に入った二、三年はよく方々とぶつかった。仕事をやろうとすれば旧来の方法を改めなくてはならない。止むをえない衝突、対立もあるし、こちらの手落ちのときもあったらう。そうしたとき、私の困った顔をしているのを見て、注意をするどころか「どうだい、だいぶ愉しんだかい」といってはげましてくれたいことは忘れられない。

「ぼくは政治がプロだが、君は都市のプロだ。」

都市づくりは最終的には君の意見に従うよ」といってくれた。事実、都市づくりに関しては委せてくれたし、かんじんな時には擁護してくれた。だからこそ、私も総合的で創造性のある今日でも都市づくりの手本になるさまざまな手法を実践できたのである。

つまり、飛鳥田さんは政治、私は「まちづくり」ということである。横浜はそれでうまくいったから、横浜のまちづくり以外のプロの政治の問題は私などが口を入れるものではないと思っていた。しかし、どうもそうではない。政治こそプロと称する政治家の独占物ではない。プロは固定的な観念の世界に立っていたり、そうかと思うと選挙の思惑で案外無原則な御都合主義をとったりする。それは、アマの市民に分かりにくく、市民にとって政治を信頼できないものにさせてしまった。本当はアマの目で素直に現実を見つめる目が必要だし、その方が正当な判断のことも多いのである。

実は自治体のなかにアマの市民参加をうったえ、市民意識をほりおこしたのが市長時代の飛鳥田さんその人であった。その流れを自らつくりだしながら、ご本人はやっぱりいわゆるプロ政治家になってしまっていたのだからか。地方や都市のことを忘れてしまっていたのだからか。

しかし、市民自治のまかれた種子は、いまま少しづつ、播いた人の思惑を超えて全国各地に育ちつつあるように思える。